

楽しい学習について

松 野 憲 二

はじめに

楽しい学習に関係する近年よく使われる表現には、楽しい授業・楽しい学校、などがある。教育・授業は学習に拠ってのみ成り立つ。学習は教育なかんづく授業に拠らなくとも単独でも成り立ちうる。だから、教育・授業と学習の関係においては、原理は楽しい学習の方に在る。楽しい学校については、もともとは学習の場であった学校の復権が本道であるから、楽しい学習に原理を求めるのは理の当然である。

楽しい学習の本質を明らかにして、その実践化に資したい。

1) 「楽しい」という概念の実感内容

動物個体としての我々の自然な実感からすれば、楽しいとは、非拘束的だという感覚を基調にして、行動の過程自体の快感を意味する。行動は本能が求める自己目的なものである。その生体一般としての即自意識現象の傾向には、行動の目的・結果はもともと組み込まれている。知的興味・関心を誘われた対象に自然に取り組めば、知的経験獲得過程の結果が自然に得られる。なにものにも拘束されない、純粹形態な行動の性質が、楽しさの根拠である。

こゝろみに、日本書籍出版協会による'98『日本書籍総目録』で、最初に「楽しい」およびこれに類する語（楽しく・楽しさ・楽しむ等）の付く書名を数えると、899冊分ある。このうち、学校・教育・学習に関係すると思われるものは、約8割であり、現今の教育界の「楽しい」への関心の度合いが窺える。編集委員会代表・板倉聖宣・月刊雑誌『たのしい授業』は、'98年に200号をこえた。著名な編集委員会代表者によって十分に推測されるところだが、内容の主旨は、知的探究行為の楽しさの強調にある。『おもしろ学校開校記念日——好奇心とエントロピー——』（名取弘文著・'84有斐閣刊）など多くのこれに類する著書で広く知られる著者の本の内容は、日常生活に関することが主題である。家庭科に関係する著者であるからこそこのことだが、日常性とおもしろさの関連性に注意が引かれる。

以上の認識を踏まえて、考究をおこなう。

2) 快を指向する行動原理の性質機能

考究の枠組みとしての本能性質の意義：楽しい学習行為を捉える思考枠組の意味内容は、快楽原則に基づいて機能する、個体本能自体の性質に求めるのが妥当と考える。楽しい、の原理的意味は、断わるまでもなく、本能欲求の充足現象である。楽しい、という意識の

状態との関連で学習の意義を究明しようとするれば、自律神経的な心理機能である、快意識現象として捉えるのを基本にせざるを得ない。動作そのものに成りきって快を感覚する、即自態な意識現象による動作ともなれば、その過程の意義は、遊びと同義である。遊び的なものならば、本能行動として捉える基本枠組みが適当である。本能的行動に、楽しい学習の固有の性質を窺る。

本能による行動は、学習によって獲得された行動と区別される。しかし、どのような行動が学習によって獲得されようとも、個体が、種としてその行動を獲得することの出来る素質を生得していなければ、学習は成り立たないし、行動も獲得できない。行動に、生得能力が直結するか学習が介在するかの違いは対照的であるが、行動が他の行動と区別されるところの固有の性質は、資質として生来のものである。この概念枠組みからすれば、知識などの経験獲得によって自分を更新・再組織しようとする本能的欲求が、学習の本来の性質であり、学習本能の固有の性質である。

快意識の自動現象を、意味内容の原理に求める本能的行動観、生得能力と行動の直接・間接の関係にではなく、生得であるから、本来・固有の性質に意義を求める本能観。これによって、楽しい学習、に関する考究の基本枠組みとする。遊びに教育的意義を求めれば、その学習的成果に注意が集中する。学習に楽しい動作過程の感覚を求めれば、遊びの意義が注目される。

生得能力の性質機能という点に着目したからには、諸本能能力の性質機能の、基本における平等性を重視する。本能の欲求の充足が快意識を現象する、そのことの意義自体に着目したいからである。生来の能力の性質機能という意義に重点を置けば、本能を無意識的・感覚的なものに限る必要性は認められない。意図的・意識的なものが内発する自然は、本能的過程である。ヒトの種の個体が持って生まれた能力は、みな、本能であって、意識的・理性的なものであろうと無かろうと、本能である点においては諸本能はみな平等の価値しかない。

考究の主対象にするのは、経験獲得によって自分を更新しようとする本能欲求自体と、さらに、これに本質として関わらざるを得ない理性の問題である。こうした観点からすれば、生まれつきの能力が現実の社会で機能するために求められる、学習の必要度合いについての、能力間の相互比較的観点には副次的な意義しか認められない。学習本能の充足されるのが楽しいのは、他の本能の場合と同様、本能欲求充足による快意識現象に因っている。

ヒト本能・理性の本質である実在への向自態ベクトル機能：ヒト生来の性質である本能の本質は、明らかに理性である。理性は実在を求める。理性能力の性質はヒトに生得のものである。上述の如く、性質自体に着目すれば、理性もまたヒトの可能態として本能であり、本能は本来、個体に種としての自己保存のために備わった能力である。実在を求めて止まないのが、理性本能の性質である。

実在を求める性質は、何故・何のためにという問題意識に機能する。この問題意識は、当然第一に、自己保存へと自己存在の実在的意義獲得を指向する。自己を保存せざるを得ない本能によって、個体にとって自己は世界で最大の関心事である。問題意識の機能自体は年齢・個性などによって、当然、多様である。知的に論理化されるとは限らない。不条理感的な漠然たる不安もあれば、自己存在が否定される死への不安的な直感の内発もあろう。自己存在の実在性への感性がほとんど働かない個体事例は、いくらでもある。

理性本能は行動に直結しない。本能としての性質が何らかの機能を内発し、学習過程を踏まえて機能を顕在化していく。自己存在の根拠を實在性に求めれば、實在の意義に基づいて、自己原因的に独立自全体として自覚的に存在しようと欲求する。理性によって自覚する性質自体が学習の課題である。学習が果たされず自覚の性質が機能しなければ、自己存在の事実が生まれたときから先行しているから、事実には則して自動的・無意識に生きるしかない。

存在することの意義は存在する事実自体にあって、自然法である。存在するものをヒトが創ったとしても、そのものを存在させるために、存在の法則である自然法に基づき、これを利用しなければならない。自己について言えば、自己の意思の機能根拠である、自己の意思に先行した個体生命現象である自己が存在する事実を、事実の存在意義として了解する以外に、存在の根拠を得る方法はない。独立自全体として、自己原因による存在を求める理性本能は、何故・何のためにという問題意識の内発となって、必然・不可避な自然法である自己存在の根拠を了解して獲得し、その主体となり、事実には則した自己決定の自由を獲得する。

個の実存は純粹形態の単体ではなく、世界内の関係存在である。理性は、自分のために自己保存のために、自分の實在を求め世界の實在を求めざるを得ない。本能である理性の欲求は、世界内に独立自全体として、自己責任・自己原因による自己存在を求めて止まない。この過程と成果に快感を得る。過程は、多くの場合、理性の素質機能により、自分存在へのあいまいな何らかの問題意識・気づき機能が内動し、何らかの外発の誘因が内在化され、内発的な自覚・意志・自己形成の動機が成立して、自覚存在としての自己形成へと展開する。

自己に實在の根拠を求める問題意識が明らかにならないのに、世界の實在を求めようとすれば、知性が単体機能して、實在探究の行為自体が自己目的となる。このとき、自分を疎外した世界の實在性は、知的好奇心の対象であって、自己存在の實在の根拠とは成らない。探究行為の成果は、自己存在に無自覚であるヒト生体の、個体本能欲求充足のために用いられることに成ってしまう。近現代思想はこれを、自然権として合理化する。

知性、つまり、自己および自己のあらゆる状況を知って自己保存に役立てようとする性質は、生物個体の本能であってヒトだけのものではない。もちろん、ヒト的な機能の特徴は顕著なものである。しかしいずれにしても、理性・自覚の本能が自己へのベクトルに實在を求めて機能して、人格の自己同一性・統合性に知性が機能しなければ、ヒト個体としての意義が実現しない。理性の本能機能の自覚による実現は、ヒト個体に必然・不可避・非選好な当為の課題である。自覚による当為の課題であるから、自覚しなければ課題は果たされない。不可避・非選好な必然の課題だから、果たされなければ、と言うより、果たそうと意図しなければヒトは質において実現しない。

生得の理性・自覚の本能の機能が、例えば、技術文明社会の中に埋没して疎外されてしまえば、自分の種としての課題に気づかないから、人格的な自己同一・統合性は成立しない。技術文明状況に刺激されて、知性は分節化して単体機能が肥大し、自律神経的に自動機能を拡大展開する。当人は知性を駆使しているつもりだろうが、実は、知性本能が個体を駆使しているのであって、個体の自己同一性・統合性は、生体本来一般の本能である、知性欲求が主体となって、学習的過程が成立・機能しているに過ぎない。理の当然、理性の制御は効かなくなる。不条理を言い訳にして、知の世界に耽溺したりすることになる。

知性は生体一般の本能として、生来、即自態の意識現象であり、状況としての自分を知るように機能はするが、人格の核心であり自分の本体である精神性には機能が及ばない。及ぶというのは、知性が理性によって機能している場合である。知性を理性の意味に使うのは自由だが、自己の実在へのベクトル機能を度外視しては、理性の本体は疎外されてしまう。自己へとメタに向自態のベクトルが意識現象しなければ、理性の働きようがない。実態は能力がわれわれの概念規定にしたがって個々別々に機能しているわけではないから、メタ認知の機能が中途半端に、つまり、実在性を求めないで働いて、自分の実態・現状を肯定的に捉えるのに満足したり、自己否定の自虐性心情に耽溺したりすることは幾らでもある。

理性の実現は自覚的な必然・当為の課題であって、完成態が生得されているものではない。可能態が本来態である。成人が自覚・理性の完成態でないことは、生体としての在りのまゝの自分を自己肯定に捉える、自意識的な実態自我が多数派である、人間実態の事実さえ素直に承認すれば、誰でも了解できる。低年齢者が、理性の完成態ではなく可能態である自然の事実の承認を妨げているのは、未熟から成熟に至るという、発達観の固定観念である。

理性本能は、ヒトが自己の種の超越的で自然な尊厳性に気づいて、自覚により学習によって限りなく実現していく自己形成の課題である。本来の性質がそこに在るから、本来性に気づき則して学習過程を自覚的に辿れば、種としての確信を基調にした、納得でき充実した快感が自ずから展開する。それは、ヒトが理性体で在ることの明証である。

3) 部分的特徴と本質

ホモ・ファール、ホモ・ルーデンス等、ヒトの特徴を主張する概念がある。ホモ・サピエンスの概念は、現代、リンネによる学名の由来である英知・理性人の意義から離脱して、単体知性人の概念に実際機能しているかにみえる。単体知性人の概念は、工作人・遊戯人等と同じく、本能の性質機能の特徴を表現するものであって、本質に関する表現ではない。単体知性がヒト個体の全体性を支配すれば、自覚存在の意義は疎外され崩壊する。ヒト個体の全体性に責任を負えるのは、自己へのベクトルに実在を求めて止まない理性だけである。

本能の生来の性質に着目し、性質が能力機能に直結するかどうかを別にすれば、理性本能も他の本能と平等に扱うことができる。理性も知的好奇心の性質に同じく、人間に普遍の本能であることが認知される。しかし、他の本能との並列観を不用意に採ると、自分への指向性において自分および世界の実在を求めて止まない、ヒトとしての本質を疎外してしまう。理性は本来、世界内に不可避な相関性において存在する自分を実感するからこそ、世界の実在を求めるのであって、必然にヒトの自己形成の原理である。

分節化された特徴は、種としての個体の全体性に位置づけられなければ本質に関われない。個体の全体性である自己同一性・統合性に読み取らなければ、本質は明らかに成らない。ヒトの種の個体の全体性は、免疫の性質のように自然・自動で神経自律的な、自己保全への生物個体としての同一・単一性の機能が基盤である。基盤である全体性の責任は、各種生物個体を事実として存在せしめている自然法自体が負っている。これに、自覚・意志・自己形成の学習による人格的同一・統合性が相乗されて、ヒト個体の種の全体性が実

現する。それが生物ヒトの自然である。一個体の全体としての単一性と同一性を実現機能せしめているのが本質である。ヒト一個体の全体を、統合して同一性に機能せしめる自己原因的意図は、自己意識を拠りどころとする、自己へのベクトルに働く理性・自覚の意識でしかあり得ない。

自覚の能力機能はヒトの自然である。自然な本来性である自覚能力が機能しなければ、自分へのメタな自覚的意識が有効に現象しない。そうなるとヒトの多様な本能は、その時々個々に時には相関・複合に、個体の同一・統合性から分離機能する。統合され連続した自分感から離脱した、個々あるいは相関・複合の本能の特徴が、単体的に機能することになる。と言うより、その時々個々に時には相関・複合に、個体の生体一般の即自態自己同一・単一性を支配下において、単体あるいは複合性質の特徴本能欲求が自律運動することになる。

われを忘れて知的興味・関心の対象に探究的に取り組む過程は、自己存在の拘束から解放された自由な快感であり、即自態な生体一般本能の機能の証明がそこに在るにすぎない。まったく我を忘れていれば、知的経験獲得の過程に自分が同化しているのだから、解放的で自由な快感は事後の感覚である。同時並行なら、自己への意識は現象してメタに過程を捉え、時には自己肯定に意義づけたりしている。

よく、知的能力を主体にして社会的に成功した人が、青少年期、いかに自分が知的対象に没入したかを公に述べていることがある。しかし、当人の青少年期の知的行為過程の実態の多くには、メタな意識が無意識的にでも働いていないとは考え難い。自分の知的行為が、何らかの意味で社会的承認・評価を得られるものであることを見込み期待しない場合が実態であるのは、まれなのではないのか。

向自態の意識現象はヒトに生得のものである。向自態の意識現象が実在性を求めずに機能するには、課題としての自覚の性質との関係は希薄である。自己保存の本能に即して自己肯定的に機能すればよいのだから、難しいことではない。無自覚的であっていいのだから、当人には下意識的なものであったかもしれない。いずれにしても、社会的に成功したために年少者のモデリングの対象に成りやすい人が、軽々に自己目的な知的探究行為を意義づけようとするのは、人心を惑わす行為である。

実態の本能の性質特徴は、独立体としての個体の全体性を基調にして機能するヒトにあって、個体の生体自然な全体性には、さらに人格自律性が相乗されるから、本能の各特徴は人格性の統御の下に機能する。人格性は、ヒトの種の自然な個体全体性への責任主体であり、自己原因的に独立自全体として生きようとし、実在の自己実現への意志によって、自分の在り方を決定し自分を形成する。意志は自覚による。自覚は理性の核心機能である。

自覚の性質本能によりヒトは、自分の自然な個体全体性に、事実としての必然な意義を理解することを通して、自覚存在であるべき不可避な生存上の課題を主体的に認知し、世界内に一個の相関の存在者であることの意義に主体となるべく、自分の生き方を決定し方向づける。それがヒトとしての自然・本来で納得できる、本質本能による快感である。

4) 学習本能の機能；生体一般（即自態）の場合とヒト（対自態）の場合

動物個体としての楽しい学習：経験獲得によって自己更新しなければ自己保存のならない動物の種にとって、学習は必然・不可避な生活行動である。

即自存在・即自態意識現象である個体には、自己を対象化した意識は働かない。と言っても、実際には、チンパンジーの自分感の検証などにみられる如く、全くの即自存在がどの種とどの種なのかは定かではない。即自存在に楽しいといった対自的感覚はない、と決めつけることは出来ない。順調に行動が進行していれば即自的に快意識が現象している、と客観に楽しい行動を認知するに留まる。ヒトの種が主題だから、意識的に自己を対象化し得ない生体一般を即自存在に概括すれば、経験獲得による自己保存能力の伸展という、必然の生活行動・学習の目的は、即自存在の動物個体にとって、学習欲求展開の過程に内発自然に機能するものである。目的への合理性の質に応じて、過程展開の自然な結果が得られる。学習する性質の機能は自然・自動的なものであり、自己保存への能力更新という目的は、経験獲得の過程にすでに内化されている。もちろん、意識はもともと何かへ向けて現象するのだから、無自覚に目的へ意識は機能している。行動の目的への合理性は個体に生得な免疫の性質のように、自己の統合性・自己同一性を維持するための自然な自律神経運動が責任を負っている。

ヒトも動物の種として、即自態意識現象が個性性の基調を形成・維持している。同時に、自覚への性質である対自・向自の意識が生来に現象・機能して、感覚意識の分野が個体の連続した統一性の責任主体となる。目的も感覚されるから、責任主体の意識機能は自律神経的な心理の働きではなく、目的意識的に働く精神の機能である。精神の世界は本人しだいだから、生体ヒトの学習が即自存在に傾いた本能行動なのか、対自存在としての本能の性質機能なのかの、判別が求められてくる。

ヒト個体の楽しい学習：理性本能に基づいた楽しい学習は、実在性に自分をメタ認知する意識のベクトル機能に拠っている。対自存在であることが種の本質であるヒトの理性欲求からして、状況内にヒト実存へと現存在せざるを得ない自分の自然法を了解し、経験を獲得して生活者としての自己を形成しようとする心的姿勢が、行為の基本枠組みである。

自然法である生体の学習意義の主体となって、学習成果への合理性を指向し、自分の学習行為過程を自律的に自己決定する。意志による人格機能に基づいた、目的への合理性の経験獲得行為過程と成果が、理性欲求の充足であり快感である。必然に状況内に相関存在者として生活せざるを得ない事実・自然法の意義を、主体的なものとすることを了解するためには、自分に内発してくる学習欲求つまり現代風に言えば知への興味・関心が、生活者としての自己形成のために、生来の本能であることを認めない訳にはいかない。経験獲得は、生活自立への生来の自然法課題を果たすために行われる、不可避な自覚的行為であることの必然な意義が了解される。動物個性性の共通項の楽しい実感を原理にしようとするならば、学習は、日常性の拘束から解放されていることを必須条件にせざるを得ない、感覚的・経験的な、～からの自由の観念に基づく行動となる。

いずれにしても、ヒトは即自・対自どちらの単体存在でもなく、即自態が基調の対自存在であり、課題としての自覚存在であるから、自覚的学習の楽しさを生体快感において実現していく課題を負っていることになる。

5) ヒト学習本能の機能変質

機能の責任主体：学習本能は、生得能力の性質の機能にとって学習過程が不可欠である種に、共通のものである。しかし、ヒトが共通性に安住して、学習行動の責任主体であろうとする意志の活性化・実現を心がけないでいると、意識活動は即自存在態へと機能変質していく。自覚にかゝわる本能の性質は、対自存在態として自覚的に活用しなければ、機能が不全に陥るのは当然である。

もともと即自存在である生体の、学習本能の責任主体は、個体自然の自律神経運動の論理自体である。自然・必然に自己保存への指向性に、生活行動である学習は展開する。実在を求めた、メタな対自・向自態意識活動が責任を負うヒトでは、責任主体が責任を放棄すると、個体の連続した統合性は維持できなくなる。多様な性質としての諸本能は、ばらばらに、機能過程の分離・独立を要求するようになる。基調である自律神経的に統合された自己同一性では、諸本能の分離・独立の要求を制御できない。人格的自律性の衰微・消滅によって、これから解放されたヒトの諸本能は、個体の統一性からの離脱を指向して独立機能を拡大する。学習本能は、自覚的な、自己更新への経験獲得を目的とする生活行動である、意志的指向性が機能しなくなる。学習本能の経験獲得的な機能過程が単体となり、経験とりわけ知的経験獲得欲求の展開運動自体の論理が、自己目的に機能の主体になる。

ヒト個体自己保存への根拠が役割である自己決定本能は、経験獲得による生活自立への人格性が機能しなくなるから、学習本能の物理的機能過程自体の根拠となる。学習本能が、性質機能の自己保存的生活行動である意義から離脱し、経験獲得行為の機能過程自体が、ヒト個体全体性からの解放の自由を欲求することになる。実際には、個体性から離脱することはできないから、個体性全体を、まるごと、自己目的な知的経験獲得行動過程としてしまうような事態となる。われを忘れた知的探究行為過程自体が、ヒトの行為としての正当性を主張するようになる。

本来、拘束からの感覚的自由を求める自己決定の欲求は、生物個体一般的な本能であるから、そのまゝの能力が行動となる。対自態意識現象が、現状そのまゝの自分を肯定することに傾きやすい、自意識現象を基調とした、自覚の実現がつねに課題である、実態自我の人びとに認知されやすい。われを忘れた知的探究行為過程自体が、個体自己決定の欲求になっていく。この事態は、生活行為としての必然な意義の主体となって、自然法における意志の自由を獲得する、自律的自己決定の欲求とは、指向性が対照的である。自律的自己決定は、理性欲求に拠るものである。個体が自己の責任主体となって自己を決定する。自己原因的存在であろうとする、尊厳な意志に拠るものである。

もし、これらの決定を権利の主張にたとえるならば、前者は、即自存在生物個体の能力資格における権利主張であり、後者は、即自かつ対自存在である生物個体が、その能力資格つまり自律的自己決定の能力行使の資格において、権利を主張するものである。

生活行動性・日常性からの解放の問題：学習機能の意義を疎外した、学習本能の機能過程自体の単体実現の主張は、機能過程である行動現象だけを問題とする、行動の純粹形態観としての明快さがある。

行動の純粹形態観は、対自態意識の現象が自己肯定に傾きやすい、実態自我が多数派である現実の人間社会では、内発・自然な生体知性欲求の感覚に適うものと思われる。人間

行動としての市民権が認められやすい。また、自己目的性という分節化された概念は、功利的ではなく何のためでもない純粋性が明快で、肯定されやすい。自己保存への生活行動である学習の、必然な意義は必然性の故に、生物個体本能である、～からの、感覚的自由を求める自己決定欲求に嫌われる。必然・不可避な事実である生活行動の意義を事実の尊厳な先行性に了解し、意義の主体となって獲得する、意志に拠った、～における自由は認知され難い。必然性の故に、拘束感・抑圧感、自己決定性疎外感から忌避されやすい。行動過程に自然に内発しない、生活行動としての意義づけである外的行動目的は、自主的・内発的な行動の自然性の機能を阻害するものとして、否定されやすい。いずれも、いわゆる人口に膾炙しやすい観方が、ヒト本来な学習本能の機能の変質を招来する。

もともと、種としての生活行為以外のところに、われわれの存在の実相は見いだせないにも関わらず、ルーチン・ワークであるとして、生物体の必然である、日常の生活行動の意義を軽視する観方の歴史は古い。ヒトとしての価値的生活行動様式の生産性に意義を見いだせない、日常性から離脱した教養観も歴史が古い。現代にあつては、ヒトとしての価値的行動様式である文化の創造力の根拠を、非日常性にこそ求めて日常生活の必然性に意義を認めない、ホモ・ルーデンス的な人間観の影響も顕著である。

ホモ・デメンスに類する人間観が影響して、理性体・自覚存在としての在り方の枠組みを、人間の主体性を損なうものとする、自然権的観方つまり生体一般性が前面に立つ思想が、人間社会の市民権を主張する。一個の生体である人間の、自然・内発な理性体・自覚存在としての本来の性質を、生体一般性によって、拘束感で捉える心的態勢は、自分に正直に生きる、というような標語が、さかんに行われるところに顕れている。自己保存への生活者としての自己形成、という生存上の不可避な課題性の主体にならなければ、学習本能はヒトの行動を実現しえない。日常性からの解放を欲求する人間観には、自己へと実在を求めようとする課題意識は観られない。

日常性とおもしろさとの関連性の実践例について、前に触れた。日常生活の具体的主題が生活感を喚起するからこそ、おもしろさの根拠が考えられる。すでにある事実としての、存在者の自然法と自己保存へと自己責任で課せられる生活行動の自然法則の必然な意義の了解は、自覚存在の当為課題である。けっしてルーチンではない。その必然・当為の課題は、実在性のゆえに、実在を自己の在り方の根拠に求めてやまないヒトの理性本能・学習本能を活性化する。

6) 自然であること：内発の学習動機

本稿の主旨からいえば、自然であるとは生得の性質の意味で、本能である。前述したように、生得の性質に着目すれば、向自に実在性を求めて、成果を主体的に生活へ実践化しようとせざるを得ない、生来の性質は、ヒトの種の特質である。その特質は、向自態に自己の実在のあり方をメタに求めて機能する、自己の意識現象であるから、個体の本質として機能する以外に、性質の意義はない。それはヒト生体の必然性である。

生来の必然な性質ではあっても、生得の能力ではない。本質として充分に機能するためには、可能態である性質を実践態にしなければならない。実在の自己実現へと、自覚的学習が限りなく続けられなければならない。自覚の能力自体も自覚的学習課題である。自覚的課題であるということは、必然の本能性質でありながら能力は生得されていないから、能力実現と実践化が当為の課題となる、ということである。自己の本質の必然な意義を了

解しなければ、当為の課題を果たすことはできない。

これらの過程は、ヒトにとって、みな自然のものである。自然ではあるが、意識的・意図的な過程としてでなければ展開しない。ヒトはまた、生体一般としての即自態の意識現象を基調として生存している。メタな、実在の自己への意識の性質機能は、自分の即自存在の性質の意義を理解する。不可避に世界内に相関して生存する、存在者の生の実相の主体であるべき、自覚が形成されていく。人格性に自己の個性性を統合した、個性的同一性を持続・展開するために、自己形成への自覚的学習動機が自然に成立する。

実在の自己実現のための自己形成への自覚動機は、自覚の性質において、自然・内発に成立する。能力の性質が感覚意識的・自覚的なものであり、無意識的なものではないが、自然に内発する性質の機能であることに、変わりはない。現今、非常に重視されている、内発・自然な興味・関心による学習の動機とくらべてみれば、性質の機能が内発する、という点に違いはない。内発的に成立する学習動機の、性質が異なるだけである。自覚動機は対自・向自態に機能し、知的なものを主体にした興味・関心の動機は即自態に機能する。即自態の動機は生体自然の感覚を誘うから、容易に自然・内発性を認知される。対自態の動機は、実態多数派的な、生体自然の自己をありのまゝに肯定する自意識に傾いた、実態自我の感覚に抵抗感を生ずる。自分の内面に不本意に手を突っ込まれるような感覚である。

しかし、いずれにしてもそれは、一個体の個性性世界内の問題である。個体の統一性が維持されるためには、人格性に、生物体としてのヒトの即自存在である意識現象のエルルギーを、生存に必須の基盤として了解し、自己の個体全体性にこれを包含することが求められる。即自態意識現象の個体を具体化するエネルギーには、自己存在根拠の実在性を自己責任で明らかにしてこそ、独立自全体としての自己原因が成立し、主体性が確立することの了解が求められる。自律的であってこそ、自己決定は現実には成立する。自己存在の事実が先行し、事実としての自己が自己保存のために自己決定を欲求するのだから、事実には内在する、存在するものの自然法によった自律性が不可避に求められる。

本能欲求の自動的発動を内発性とするならば、実在性に則して实际的に自己決定しようとする理性欲求も内発性の根拠である。自立への生活行動、という知的経験獲得行動過程の外にある目的からの動機の外発性は、自然・自動・内発の分節化された純粹形態には合致しないが、現実の内発性に矛盾するものではない。本能つまり生得の性質が自然に内発するといっても、全く状況に誘発されない場合は、きわめて基本的な本能以外にはまれである。状況の中で自ずから成立する動機は、内発のものである。一方、純粹形態外発の動機が実際に成立するものもまれである。外発の刺激に反応がなければ内発のしようがない。水場につれてきた馬が水を飲むかどうかの譬えではないが、誘いに乗らなければ動機は成り立たない。

実態の動機は、単体の内発性・外発性では、ほとんど成立しない。現実には、内発性と外発性の比重が問題になるのであって、外発性に比重があれば、動機の主体性が問われることになる。内発性のまったくない動機は成立しない。知識の注入、などという言い方がある。注入に応ずる心的態勢がまったくなければ、注入は成立しない。問題は、外発に応ずる内発性の質にある。

自覚動機は自分が自分に成立させるものであって、他者が自分の内面に侵入して、自分に関わりなく造るものではない。状況に関わらない単体の自己は仮想現実である。世界内に実存する事実の了解が、ヒトの学習動機の基本形態である。

おわりに

即自存在の自己保存への責任主体は、個体の、一個体としての統合性を自律神経的に維持している自然法則自体であるから、学習本能は自然に、自己保存の目的への合理性に生活行動として機能する。生体として即自存在であると同時に、対自存在でもあるヒトの責任主体は、個体自体の、自己原因的に独立自全体であろうとする自覚・意志である。自覚して、自分の本能を生体自然法に則して機能せしめようとしなければ、個体の統合性は機能不全となる。学習本能は、個体統合性から離脱して、経験獲得行動過程運動体の単体となる。自分の行動が自己保存への合目的性を疎外している状態を、生体一般必然の生活行動からの解放、と意義づけて自己肯定すれば、自己目的化した経験獲得欲求が個体の主体となり、独立自全性は消滅する。

即自かつ対自存在であるヒトの本来性に拠って、自分が学習本能の責任主体になり、自分が納得して、生活者としての自己を形成する学習へと自律的に自己決定し行動すれば、成果への過程は、自ずから充実した快意識を自分に保証することになる。